

中河與一「ゴルフ」考：初出誌・初刊本の 異同について

黒田, 俊太郎 / KURODA, Shuntaro

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

90

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

244

(終了ページ / End Page)

220

(発行年 / Year)

2023-03-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026463>

中河與一「ゴルフ」考―初出誌・初刊本の異同について―

黒田俊太郎

序

「ゴルフ―名鏡に這入る女―」（『文藝春秋』一九三二「昭和六」・一〇）は、中河與一（一八九七―一九九四）の短篇小説である。同小説は、大小様々な改稿が施され、「ゴルフ―一名、鏡に這入る女―」として小説集『ゴルフ』（昭和書房、一九三四・一〇）に収録されている。本稿では、両者の本文について校異を実施し、その異同の意味について若干の考察を行うものである。

凡例

一、「ゴルフ―一名鏡に這入る女―」（『文藝春秋』一九三二「昭和六」・一〇）を「ゴルフ」、小説集『ゴルフ』（昭和書房、一九三四・一〇）所収の「ゴルフ―一名、鏡に這入る女―」を『ゴルフ』と表記する。また、総称として、小説「ゴルフ」という表記を用いる。

二、漢数字で『ゴルフ』の頁数、アラビア数字で『ゴルフ』の行数を記した。

- 三、△『ゴルフ』本文↑「ゴルフ」本文△のようになり、↑の前後で改稿を示す。
- 四、「ゴルフ」には無かった文言が純粋に加筆された部分については、『ゴルフ』本文↑□、のようになり示す。また逆に、「ゴルフ」本文に有った文言が純粋に削られた部分については、□↑「ゴルフ」本文、のようになり示す。
- 五、『ゴルフ』の同一頁同一行に異同が見られる場合、改行して併記した。
- 六、旧字体は新字体に改めず、そのままにした。
- 七、明らかな誤植は校異には記さない。
- 八、「ゴルフ」・『ゴルフ』はともにパラルビだが、それらのルビの異同は校異に記さない。
- 九、主要な登場人物一名の名前が変更されているが、指摘は最初の一度だけとした。

校異

五

- 6 イオニア海からそよそよと、ギリシャ神話が、風になつて吹きあげて来た。うららかな古典にとり巻かれながら、久里は、今椅子の上で一本の煙草を吸ひ終つた。↑ギリシャ神話がイオニア海からそよそよと風になつて吹いて来た。うららかな古典に巻かれてゐる高い緑色のゴルフ場に立つて、久里は一本の煙草を吸ひ終つた。
- 12 やがて彼は密生した芝生の上へ妻と一緒におりて行つた。小さいティを草の中に立てると、眞つ白のボールをズボンから掴みだして、其の上に乗せた。↑密生した芝生が露でしめつてゐた。彼は小さいティを草の中に立てらずと、眞つ白のボールをズボンから掴みだして其の上に乗せた。

14 する↑した

15 買入れたばかりのクラブを動かすと、むつかしい顔↑買ひ入れたばかりのクラブを動かしながら、氣むづかしい顔

六

1 共に勢ひのいゝショットをだした。↑共に、勢ひよく球を打つた。

2 スウツと↑ボールがスウツと

球の弾道↑弾道

5 、小さいボールを目で追つてゐた。それは↑自分に感心して立つた。小さいボールは

6 落ちると、↑落ちると

如何にも↑それが實に

14 彼女の方も大變に↑妻君の方がもつと

七

4 二人の會話には、↑二人の會話には

何かのこだはりのやうなものが、↑深い感情が

5 やがて彼等は二人の少年を従へると、↑彼等は二人の少年を連れて

6 妻↑妻君

妻↑妻君

- 7 あの張りつめた↑張りつめた
想像して胸を重く↑想像して
- 8 あのと突然現はれて吾々の胸に影を投げたフランス女。↑なんと幸福な夫婦生活。
12 おかしくみえた。↑みえた。
- 八
- 1 なかつたわ。↑なかつた。
思ふと皆たのしかつたの。↑思ふと、皆たのしかつた。
- 3 ルイーゼ↑アニエス
5 はないの。↑なくてよ。
6 少年からミッド・アイアンのクラブを受取ると、又無心の形をしてルイーゼが草の中にある白い球を打つた。
↑アニエスは少年からミッド・アイロンのクラブを受取ると、又無心の形をして草の中にある白い球を打つた。
- 7 低く蝶々のやうに地面を摩りながら↑反つて低く
- 9 、その上頭厄介なハザード↑一度だけおくれた。その上頭厄介なバンカー
10 しまったわ。↑しまった。
12 亦同じハザード↑又バンカー
- 15 唯だ歩いた。歩いてゐるとやがて彼等は何もかにも忘れた。↑又歩きだした。何もかにも忘れてゐた。

- 九
- 1 するらしかった。↑してゐた。
 - 2 方角を、小舎の方↑方を、小舎
といふのは、彼等↑彼等
 - 3 曲藝師で、彼等の空中曲藝こそ↑曲藝師であつた。彼等の空中曲藝
の一つになつてゐたから。↑であつた。
 - 4 ドイツ女↑フランス人
 - 5 一九三一年↑一九三〇年
 - 6 □↑丁度い、對照をしてゐた。
 - 9 置いてある。一萬六千人もゐるアメリカの民間飛行家の中から選ばれた二人。↑置いてあつた。
 - 11 離れ業は、↑離れ業は
 - 12 描きだす。↑描きだした。
 - 13 逆さまにつりさがる。↑、倒しにつりさがつた。
 - 14 グルグル巻く。↑巻いた。
- 一〇
- 6 、機械文明の持つてゐる明らかかな一つの方向である。↑機械の廻轉によるの
 - 8 久里は幾度目かのバンカーで又手こずつてゐた。熊手でよく整理してある砂を叩きあげながら、↑熊手でよく

- 14 9 整理してある砂を久里は叩きあげながら云つた。
空でする操作↑空に浮きながらする仕事
見るとでせう。↑見るとね。
- 1 一
2 パターを持つと↑パットを持ちなほすと
3 キヤデイが二人の爲めに↑二人とも
4 方々に↑方々で
7 餘り無言がつづく、今度はどう思つたのか、ルイーゼの方から云つた。↑今度はどう思つたのか、彼女の方
8 から氣嫌を取るやうに云つた。
9 か、つて↑かかつて
14 持つて、↑持つてて
15 又一寸ひつかゝり↑一寸ひつかかり
- 一
二
5 出たり、↑出たり
8 街は古い傳統を持つてゐる、然し、↑そこは古い傳統を持つてゐるが、
9 見えてゐる。↑見えてゐた。

11 俺達の方↑俺達の顔

一三

1 球は↑球が

引くと↑引きながら

5 何時も三面鏡の前へ腰をかけて化粧をした。↑三面鏡の前へ腰をかけて化粧をしてゐた。

10 見つめてゐると、↑□

11 場合でも、↑場合も。何時も話をしてゐた。

12 鏡の中の久里↑久里

13 いろ／＼↑いろいろ

14 五年前に↑五年前に、

一四

3 やがて彼等はジプシイ・モスを仕入れた。↑ジプシイ・モスを仕入れた。

8 親切だつた↑よかつた

10 誰れか↑誰れかが

13 馬鹿↑甘い馬鹿

15 いろ／＼↑いろいろ

- 12 一五 誰れかゞ↑誰れかが
- 13 一七 亦↑又
- 一八
- 1 事↑作業
- 8 持つても↑持つても、
- 11 そんなら↑それなら
- 14 思ふんだ↑思ふんだがな
- 一九
- 6 又不平を云つた。↑怒つた。
- 11 認めるのにはなかくの↑認めるのには、なかなかの
- 13 うか／＼。↑うか／＼か。
- 15 つゞければ↑つゞければ

二〇

6 熱中してゐるんだい。↑熱中してゐるのか知らない。

8 どうしてなの↑どうしてだ

二二

4 ○・六↑○、六

5 發見せられ、ば↑發見せられれば

14 部屋の空氣が息づまりさうになつてゐた。↑息づまるやうに部屋の空氣が重くなつてゐた。

二二

2 ものなら↑ものだつたら

努力をして來た。↑努力をしてゐる。

3 一寸彼も氣色ぼんだが冷靜に答へた。↑□

4 あのフランス女と逢つてゐると、女は何時も黒い面帕をつけて來た。その心に残る美しさが彼の心にしみついた事を思ひだした。初めて逢つた時、あの瞬間、思ひつくと自分の眼は↑あの女と逢つてゐると、あの女もゴルフが好きであつた。自分の眼が

9 その時、彼は感情を水平に保たうとした。女を警戒しだした。毛彫りのやうに心理が緻密に動いた。↑彼は感情を水平に保たうとした。毛彫りのやうに心理が緻密に動いた。彼は女を警戒しだした。

- 11 彼はそんな事を考へながら女と幾度も逢つた。逢ふ場所は林の中や、草の中であつた。恐らく原始を思ひだしてゐるのに違ひなかつた。サロンでする戀愛は何時も疲れてゐる。↑□
- 12 それにしても彼は↑彼は
- 14 自分は女から遠ざからうとしてゐる。↑□
- 二三
- 3 気がして、然し靜かに云つた。↑気がして叫んだ。
- 7 平凡だが愛情の芽↑愛情の芽
- 9 ロシアの自由な離婚法↑ロシアの離婚法
- 11 眺めたいんです。↑眺めたい。
- 13 久里は長い間黙つてゐてから、云つた。↑久里は黙つてゐると、云つた。
- 二四
- 6 祈つてゐるの。↑祈つてゐます。
- 9 あのフランス女を好きだしたつてわけね。↑好きな人が出来たつてわけね。
- 15 壊れかゝつた↑壊れかかつた

- 1 なびきか、つたり↑なびきかかつたり
- 2 アルゼンチン趣味が来て人々をあつと云はせるかと思ふと↑アルゼンチン趣味が来て、人々をあつけにとらせ
- 3 皮肉から始めたたり、↑皮肉から始めた。
- 4 景観を誇つたり、↑景観を誇り、
- 7 持つて來られるし、持つて來られ、
- 8 臭いガソリンを人々に吹きかけた。↑ガソリンを吹きかけたり、
- 9 一枝を手に持つたり↑そのうへ、一枝を手に持つたり
集つて來てゐる。↑集つて來てゐた。
- 10 革の草履をはいた↑觀衆の中には革の草履をはいた
物珍らしさうに會場の中をうろろしてゐる。↑交つてゐた。
- 12 今割れるやうな↑今割るやうな
- 13 つゞけてゐた。↑つゞけてゐた。
- 15 廻つてゐる。↑廻つてゐる

二六

- 6 幾度か格納庫ぬけを繰り返した後、空の中に浮んだ。↑駆けあがるやうに空の中に浮んだ。
- 9 背面になつたり、↑□

二七

6 あまのはら↑あまの……

12 恥づかしさうに描いては消し、消しては描き↑恥づかしさうに描いては消し、描いては消し

二八

4 つづられた。↑つづられた。

5 今全然地上では↑今、全然地上では

6 柔かい絨氈になり、↑薙のやうになり、

8 まゝ↑まま

9 あのフランス女↑あの女

11 もつと下へおりするよ↑もつと下へおりするよ。

12 くゝりつけて↑くゝりつけて

二九

3 観衆の頭とすれすれに↑観衆の頭をすれすれに

9 逆さまに↑倒しに

13 ささへてゐる一本の足をさへ↑一本の足をさへ

14 逆さまになつたまゝ↑倒しになつたまゝ、流星のやうに

15 それは一つの埃りのやうにチラチラしたかと思ふと、見えなくなつたり、ハッキリと観衆の眼に映つた。↑
それは一つの埃りのやうにチラチラした。

三〇

1 だが誰れも危険を感じなかった。↑誰も危険を感じなかった。

2 愛情↑愛

8 かも知ら………。↑かも知れない。

11 鏡に向つてゐる自分ほど幸福なものはない。↑□

13 何か↑何が

と、パラシユートがパツと開いた。↑と、パラシユートが開いた。

14 ゴルフのボール位にしか見えなかつたが、パラシユートにかゝつてゐる久里であつた。↑ゴルフのボール位の白い球に見えた。パラシユートにかかつてゐる久里である。

三一

8 だが彼は今最後の傘を開かうか、開くまいかと考へてゐた。↑だが彼は最後

9 今明らかに自分は空の中の最も大切な友達を意識か無意識の中で見失つてしまつてゐる。↑今明らかに空の中の大切な友達を意識か無意識の中で見失つてしまつた。

10 死ななければならない。↑死ぬべきだと思ふ。

11 消へてしまふだらう。↑消へてしまった。

冒険↑事

三二

1 善良なものか悪魔的なものか↑善良なものか、悪魔的なものか

2 自分はそれを開いてやった方がいいのか、それともそのままにしておいた方がいいのか。そのままにしておけば恐らく自分は地面に向つて烈しい衝突をするに違ひない。↑自分は死ぬべきか。生くるべきか。

4 近づくに従つて次第に↑近づきつつ

7 瞬間の曲藝を開始しようとしてゐた。観衆の心に恐ろしい不安が起つた。↑恐ろしい瞬間の曲藝を開始しようとしてゐた。

9 それ以外に彼の生命を決定する何物もなかつた。↑□

10 長い時間。↑長い時間、

13 飛行機と、↑飛行機と

14 秋晴れの雲↑秋晴れの中の雲

本論

①タイトルと本文の主な異同

「ゴルフ」(一九三一・一〇)には、「——名鏡に這入る女——」との副題が付されている。この副題には、『ゴルフ』

(一九三四・一〇) 刊行の際に、「一名、鏡に這入る女」というように、「一名」の後に読点が打たれた。「一名」とは言うまでもなく異名・別名の意であり、両者は主題／副題というような階層性が含意されるような関係にはない。

ところが、これらの順序は、小説集『愛の約束』(人文書院、一九四〇・三)所収の際に逆転して「鏡に這入る女―一名ゴルファー」となり、以後、生前に刊行された全集や文学全集、文庫本などでは、おおむねこの順序が踏襲されていく。ただし、『鏡に這入る女』(村松書館、普及版一九八〇・一〇、限定版一九八〇・一一)刊行の際に、「一名ゴルフ」の文字が消失する。

こうしたタイトル変容の軌跡から、次のようなことが推測される。中河は当初、タイトルを決めかね、一名を併記することとした。初出からおよそ九年を経ても、一名併記の状態は変わらないものの、次第に「鏡に這入る女」というタイトルを優先するようになり、そうした心境は晩年に強くなっていった。

こうした微細かつ緻密に計算された改変は、タイトルだけでなく本文に対しても、晩年にかけて断続的に行われたが、なかでも本稿が検討している『ゴルフ』刊行時の改稿は多岐に亘るものだった。このときの最大の変更点は、西村将洋がすでに指摘しているように、「女性性の置き換え」⁽¹⁾ということである。

「ゴルフ」の主な登場人物は、アメリカ生まれの日本人「久里」と、その妻である「フランス人」の「アニエス」である。また目立った登場シーンはないものの、久里の国籍不明の愛人を、潜在的な登場人物として数えることができる。これらの登場人物のうち、女性二人の設定が、『ゴルフ』刊行の際に変更されている。すなわち、「フランス人」の「アニエス」は「ドイツ人」の「ルイーゼ」となり、国籍不明の愛人は「フランス人」と明記されるようになる。

こうした「女性性の置き換え」について、西村は「形式主義から全体主義へ向かった中河與一の道程と軌を一にしている。例えば、中河與一『形式主義芸術論』（新潮社、一九三〇年一月二日）にはフランスの建築家ル・コルビュジエなどへの好意的な言及があり、中河與一「民族文化主義」（『日本浪漫派』第三卷第二号、一九三七年三月一日）には、全体主義（ナチズム）への傾倒が記されていた²⁾とする見取り図を示している。ただし、こうした『ゴルフ』刊行時に見られた「女性性の置き換え」と、「形式主義から全体主義へ」という中河の思想上の転換とが、「軌を一にしている」とまでいえるのかということについては、検討の余地がある。

というのも、中河が「民族文化主義」を発表して全体主義を鼓吹した一九三七年、版画荘が刊行を開始していた版画荘文庫の一冊（整理番号21）として『ゴルフ』（版画荘、一九三七・一一）が刊行されているが、このとき、久里の妻は再び「フランス人」の「アニエス」に戻され、久里の愛人は「フランス人」から「ドイツ人」へと変更されているのである。『ゴルフ』刊行時に久里の妻が「ドイツ人」に変更されたのは、中河の思想が全体主義的傾向を強めていったからとする理屈では、こうした事態を領略できない。

版画荘文庫刊行時のこの変更は、その後の小説集『愛の約束』（人文書院、一九四〇・三）、『天の夕顔 他一篇』（角川書店、一九五〇・六）、『香妃 氷る舞踏場 他五篇』（角川書店、一九五一・一一）、『昭和文学全集49』（角川書店、一九五四・一一）に所収の小説『ゴルフ』にも踏襲されていく。しかし、『中河與一全集』（第三卷、角川書店、一九六七・二）所収の際に、中河はいくつかの改稿を行っているが、「アニエス」の出生地は「油田都市タルサ」（米国オクラホマ州）、久里の愛人は再び「フランス人」となり、以後この設定が変更されることはなかった。

このように、中河は女性登場人物の出生地について、明らかに意図的な操作を行っているが、その意図は必ずしも明確ではない。

またそのことに加え、そもそも『ゴルフ』刊行前後の中河の思想は、確かに、小説の内容よりもその形式を重視する形式主義を脱しようとしていたが、いまだ全体主義と名状しうるようなものではなかった。一九三一年から翌年にかけての中河が、〈科学とロマン〉が交差する地点を模索していたことについて、私はすでに論じている。このときの中河の議論は、ひたすら形式の重要性を主張するところから、「古典・悲劇、そして美の回復という三位一体の理念」に基づき、「美しさ」という価値Ⅱ内容を小説に求めるようなものへとシフトしていったのである⁽³⁾。

むろんこうした発想の内部には、既に全体主義思想へと発展していく要素が胚胎していたと考えているが、それが明確な輪郭を獲得するのは、一九三七年頃以降のことなのである。

②「アニエス」「ルイーゼ」の語源と内包されたイメージ

ここで、久里の妻の名前の変更について簡単に触れておこう。まずは梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』（大修館書店、二〇〇〇・七）における、「アニエス」に関わる部分を参照したい。

アグネス (Agnes) は、ディオクレティアヌスの迫害によって殉教した聖女アグネスにあやかる名前として人気があった。『黄金伝説』によると、アグネスは敬虔で、慈悲深く、思慮深い、聡明な乙女であった。彼女は、ローマの長官の息子に言い寄られるが、神に仕える身であると拒否した。そのためにキリスト教徒であることが露顕し、裸にされてローマ市中を引き回された。しかし、髪が伸びて全身を覆うという奇跡が起こるのである。

Agnesは、ギリシヤ語 *hagnos* (ἁγνός: 聖なる、純な、貞節な) が語源の名前である。 *hagnos* の女性形 *hagne*

(*agnus*) が名前となり、ラテン語 *agnus* を経てヨーロッパ中に広がった。ギリシャ語における滞気音 η は平俗ラテン語では脱落し、 α のために $-g-$ が $-n-$ に同化してローマ時代から名前 *Agnes* はアニエスと発音された。⁽⁴⁾

「アニエス」はヨーロッパ圏で定番の名前 *Agnes* のフランス語読みであり、「聖なる、純な、貞節な」という意味のギリシャ語を語源に持つ。キリスト教の聖人伝集『黄金伝説』に登場する聖女アグネスもまた、語源であるギリシャ語のイメージを体現したような人物といえる。

また殉教した聖女アグネスのイメージは、久里の妻の死を殉教という文脈で理解する契機も我々に提供する。久里の妻は、「貴方（稿者注、久里）の偉大な齒」を、「印度の釈迦さんの舍利のやうに、私あれを今も大切にしている」と久里に告白しているように、久里をまるで信仰の対象とするかのように想い続けていた。物語のラストで、久里との曲芸飛行中に久里に手を離され、海へと落下しながら「死」を覚悟するなかでも、久里の妻は「幸福」を実感するのである。

それゆえ、即断は避けるべきだが、「相手のためにみずからを捧げて惜しまないものとしての恋愛の小説」⁽⁵⁾ の系譜、すなわち、「天の夕顔」(『日本評論』一九三八・一)へと結実していく一連の「恋愛小説」の初期のものとして、小説「ゴルフ」を位置づけることもできるのではないか。戦時下の中河は、「国が起る時は人の愛が真に燃えてゐる時である」⁽⁶⁾ として、「恋愛小説」を書くことで、全体のために個を犠牲にする献身の精神＝全体主義思想を人々に注入することを企図していたのである。

一方、梅田の同書によると、「ルイーゼ」の語源は、「男性名ルイ (Louis) から派生した女性名」で、「ナシヨナリズムが高揚した18世紀から19世紀のドイツにおいて特に人気のある名前となった」という。そして特に国民に愛

されたのは、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の王妃ルイーゼ・フォン・メクレンブルク＝シュトレーリッツだった。

彼女は、フリードリヒ・ヴィルヘルムなき後ナポレオン戦争においては、戦うプロイセンの象徴として甲冑に身を包むヴァルキューリーのようにイメージされ、母としては、子どもたちに愛を注ぐ慈母マリアのイメージが付与され、そして妻としては貞節な女性の象徴として熱烈に愛された。このようにプロイセンが愛し、後にドイツ帝国の国母として愛されたルイーゼは「聖女」とされた。⁷⁾

一九世紀以降のドイツにおいて、「ルイーゼ」という名前は、王妃ルイーゼのイメージを纏うことになった。それは「貞節」「聖女」といった、当時理想とされた女性像に、「ヴァルキューリー」という〈戦士〉としてのペルソナを加えたものだったが、「アニエス」という名前が喚起するイメージと決定的に異なるのは、この〈戦士〉としての側面であろう。

中河が、名前のルーツや、名前に内包されたイメージを意識したかは不明である。しかし、三部構成の小説「ゴルフ」の第二部では、女性の経済的自立という問題に端を発し、一夫一婦的な婚姻制度の是非をめぐる夫婦の相克が描かれ、「女よ、男をたよるべからず。斯ういふ教訓を總ての女に教へたい」と妻に叫ばせており、中河は「ルイーゼ」へと名前を変更することで、男性原理的な因習や思想に挑戦しようとする女性としての一面を強調しようとしたのかもしれない。

ただし、「ルイーゼ」の名は、『ゴルフ』でただ一度使用されたのみで、これ以外の小説「ゴルフ」では、戦時下

もその後も、一貫して「アニエス」の呼称が用いられている。仮に中河の思想的メッセージが久里の妻の名に寓意的に仮託されているのだとすれば、全体主義思想の系譜を表現する名前としては、先述した理由により、むしろ「アニエス」の方が適合的であるとすることができるだろう。

③ 「美しさ」の二面性

次に、そうした夫婦の相克の原因ともなった、久里の愛人に関する記述の異同を確認したい。まず見たいのは、第一部で夫婦がゴルフをする場面である。

久里は妻君を時々見ながら、全く呼吸のあつてゐた昔の事を思ひだしてゐた。が妻君は夫が別の女と一緒にゴルフをしたりしてゐる時の、張りつめた親切な言葉や身體つきなどを想像してゐた。なんと幸福な夫婦生活。
 (『ゴルフ』)

久里は妻を時々見ながら、全く呼吸のあつてゐた昔の事を思ひだしてゐた。が妻は、夫が別の女と一緒にゴルフをしたりしてゐる時の、あの張りつめた親切な言葉や身體つきなどを想像して胸を重くしてゐた。あの突然現はれて吾々の胸に影を投げたフランス女。(『ゴルフ』)

ここでは、久里、アニエスの順に内的焦点化が行われているが、注目したいのはアニエスの内面が記述された傍線部分(傍線はいずれも稿者による)である。「ゴルフ」では、愛人とゴルフをする際の久里の「言葉や身體つき」

など、直接見聞きしたわけではないものをアニエスが「想像」していることが報告されている。この「想像」は、嫉妬にかられたアニエスの〈妄想〉と換言してもいい種類のものである。

一方、『ゴルフ』では、「あの」という連体詞が加筆されたことで、久里の「言葉や身体つきなど」をアニエスは過去に直接目撃したというニュアンスが加わり、「想像」という語はむしろ〈想起〉の意味で用いられることとなる。

すなわち、久里の愛人がアニエスにとってより身近で実体的な存在として描かれるような変化がなされている。同様に、『ゴルフ』では外見的特徴など具体的な記述が一切なく、読者にとっても掴みどころのなかった久里の愛人について、『ゴルフ』ではより具体的な記述がなされるような変更が見られる。第二部の夫婦の口論の最中に、久里が愛人と初めてあった時のことを想起する場面を比較してみよう。

その時、彼は何時であつたか、あの女と逢つてゐると、あの女もゴルフが好きであつた。自分の眼が總てのものを間違へて眺めだしてゐるのに気付いた事がある。（『ゴルフ』）

その時、彼は何時であつたか、あのフランス女と逢つてゐると、女は何時も黒い面帕をつけて来た。その心に残る美しさが彼の心にしみついた事を思ひだした。初めて逢つた時、あの瞬間、思ひつくと自分の眼は總てのものを間違へて眺めだしてゐるのに気付いた事がある。（『ゴルフ』）

『ゴルフ』には、「女は何時も黒い面帕をつけて来た」とある。「面帕」とはヴェールのことだが、『ゴルフ』では

まさにヴェールに包まれてきた愛人の外見が、ここで明るみにされることとなる。

ヨーロッパでのヴェールの意味作用についての文化的研究を行ったルドミラ・ジョーダノヴァによれば、一八世紀以降、「女の肉体にヴェールをかける／剥ぐという行為には、二つの意味合い」があったという⁽⁸⁾。第一には、「女のみだらさを隠し、社会的ないしは心理的な安定を得ることを保証するもの」としての意味合いである。そして第二には、「秘密をほめかす」という意味合いであり、この場合の「秘密」とは、「性的な秘密であり、女とプライベートのあいだにある様々な連想と結びつく」ものであった。すなわち、〈隠す／見せる〉という背反する性格が、「ヴェールのエロティックな動力学の源泉」⁽⁹⁾となってきたという。

事実、『ゴルフ』では、「黒い面帕」で顔を覆う女に「初めて逢った時、あの瞬間」に、その「美しさ」が久里の「心にしみつい」ている。さらに「彼はそんな事を考へながら女と幾度も逢った。逢ふ場所は林の中や、草の中であつた。恐らく原始を思ひだしてゐるのに違ひなかつた。サロンでする戀愛は何時も疲れてゐる」と、愛人との逢瀬の場面が加筆されることで、久里が愛人の「美しさ」に感溺し、「ヴェールのエロティックな動力学」に拘束されていくことが明示される。

一方『ゴルフ』では、ヴェールを纏った女の魅惑的「美しさ」が、久里の「眼」が「總てのものを間違へて眺めだして」しまう（＝「気違ひになる」）原因と規定されてもいる。もっとも、「美しさ」と狂気の関係性についての説明はないものの、『ゴルフ』では、直後に「自分は女から遠ざからうとしてゐる」との文言が加筆されたことで、「美しさ」に孕まれた負の要素への久里の警戒が示されることとなる。

このように、「美しさ」というものの決定不可能性に驚異を感じる久里の姿を新たに書き込むことで、「美しさ」をめぐる問題が、『ゴルフ』では前面に浮上させられている。こうした動向は、先述したような「美しさ」という

価値Ⅱ内容」を小説に盛り込もうとしていた当時の中河の思想状況を浮き彫りにしているといえるだろう。

結論

中河與一の小説である「ゴルフ」(一九三一・一〇)と『ゴルフ』(一九三四・一〇)、それぞれの本文について校異を実施した結果、先行研究が「女性性の置き換え」と呼称したような事態が確認できた。それは、主要な登場人物の一人である久里の妻が、「フランス人」の「アニエス」から「ドイツ人」の「ルイーゼ」へと変更されたことに代表されるものだが、そうした事態は、先行研究が指摘したような、「形式主義から全体主義へ」という中河の思想的転換と呼応するものではなかった。むしろ、久里の愛人の「美しさ」に関する記述が加筆されたことにより、狂気を孕む「美しさ」の両面性が前景化されたことは、「美しさ」という価値Ⅱ内容」を小説に求める方向へと形式主義からシフトしていく過渡期にあった、中河の芸術理論の表れを見ることができると考えられる。

注

- (1) 西村将洋「浪漫派の「ゴルフ」―『日本浪漫派』創刊前後―『日本近代文学』72、二〇〇五・五、一一二頁
- (2) 同前
- (3) 拙稿「中河與一の科学的ロマンス主義―雑誌『新科学的』刊行期間中の思考をめぐって」『鳴門教育大学研究紀要』37、二〇二二・三、一一三頁
- (4) 梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館書店、二〇〇〇・七、一三四頁
- (5) 中河與一「恋愛小説について」『全体主義の構想』作品社、一九三九・二、五三頁
- (6) 前掲、中河「恋愛小説について」五四頁

- (7) 前掲、梅田『ヨーロッパ人名語源事典』二二六頁
- (8) ルドミラ・ジョーダノヴァ「第五章 科学の前にヴェールを剥ぐ自然」『セクシユアル・ヴィジョン 近代医科学におけるジェンダー図像学』宇沢美子訳、白水社、二〇〇一・六、一四〇頁
- (9) 前掲、ジョーダノヴァ「第五章 科学の前にヴェールを剥ぐ自然」一三七頁

附記 本研究はJSPS 科研費21K00306の助成を受けたものである。

Yoichi Nakagawa's "Golf": A Comparison of the Original Text (1931)
with the Text in the First Book Edition (1934)

Shuntaro KURODA

《Abstract》

Yoichi Nakagawa first published his short story "Golf" in the magazine *Bungei Shunju* in 1931. In 1934, he published a collection of stories titled *Golf*, which also included his short story "Golf." In this paper, the original text published in 1931 is compared with the text that appeared in the first book edition in 1934 and the differences between them are analyzed. For example, the meaning of the change in the name and nationality of the wife of Kuri, one of the main characters in the story, is discussed with reference to the etymology of the names and the images they evoke. A further focus is on the addition of descriptions of the beauty of Kuri's mistress in the first book edition. While writing "Golf," Nakagawa was attempting to embody his idea of beauty in his stories. By comparing the original text in the magazine with the first book edition, it was possible to discover how Nakagawa's artistic theory developed during this period.